

次の
I の問題は、「国語(1)」の受験者、および「国語(2)」の受験者に共通の問題です。(解答番号は 1 ～ 19)

I 次の文章を読み、後の問い(問一～問十)に答えよ。(60点)

家族を問題として設定するのはなかなかむずかしい。それは家族はさまざまな矛盾が凝集する場所であり、さまざまな対立項で構成されている場所であり、呪いと憧れとが錯綜する場所であるからだ。

まず、家族は〈自然〉と〈制度〉の接点であり、交点である。それは、いのちの生産と再生産、つまり生殖と食と保育をコアとする、まさに人間の自然に深く根づいた関係である。ここで家族の成員はその身体空間をたがいに深く交わらせる。が、それと同時に家族は、「家」の意識や養子縁組にみられるように、社会という擬制的な制度が紡ぎだされるその原点ともなるものだ。

家族はまた、外部の権力から身内を護る防壁であると同時に、それじたいが権力の雛形である。権力の雛形であるというのは、一家の主とその被扶養者という権力関係(命令と服従の関係)を生みだす社会の最小単位であるということである。別の言い方をすると、家族は、民を管理する国家組織の最小単位(社会への登録の最小単位)であると同時に、そうした権力への民の抵抗の拠点ともなりうる場所である。

第三に、家族は、深い信頼感で結ばれた親密な「われわれ」(一、二人称の関係)が維持される場所であると同時に、競合する他者との関係(三人称の関係)が発生する最初の場所でもある。じっさい、家族は身を寄せあう内密な場所であるのみならず、「兄弟は他人のはじまり」といわれるように、たがいに他者であるということが至近距離で思い知らされる場でもある。最後に、ケアという視点からみれば、見返りを求めることなくたがいの世話をしあうという家族成員の関係は、一方が他方の世話をしながら見返りはもとめないという点で、互酬性のない関係である。それは献身の関係であるといえるが、それを裏

返せば一方が他方をひたすら搾取する関係であるともいえる。つまり家族は、果てしない競争とその調停の手段としての契約でもって成り立つわたしたちの社会において、そこからの避難所として機能するが、一つまちがえば、高齢者介護の悲惨さにしてしばしば見られるように、徹底した搾取の場所ともなりかねないものだ。家族のためには労を惜しまない、犠牲になることも厭わ^{いと}ない、ひたすら尽くす、どんな事態になってもつねに味方である……というような関係が、

ア

〈家族〉という信頼の環^わをかたちづくってはいる。けれどもそれが搾取の環に裏返る可能性をつねにもっているということを頭に入れておくことも必要だ。

イ

家族は、人間関係の対立する二つの契機が和解不能なたちで交差し、共存している、矛盾に満ちた場所としてある。性交、受精、出産、保育といった生きものとしてもっとも

B

ないとなみをなす、家族というこの持続的な装置は、人類史のなかでもきわめて多様な形態を採ってきた。近代という時代は、家事というかたちで家族のメンバー（とくに女性）に負わされてきた家族の機能を、家庭外のサーヴィス機関に委託する傾向を推しすすめた。調理、排泄物^{はいせつ}処理、洗濯から医療、保育、^aカンコン葬祭、看病、介護まで、メンバーの生命機能に

ウ

かかわる世話を、金銭をもって外部の専門職に委ねるようになった。これによって家族は、〈家庭〉という、文字どおり身体空間をたがいに深く交わらせるような、私的な愛情と親密さの場所が変わったのである。が、そういう観念によって支えられる家族というものが、

エ

脆^{もろ}いもの、壊れやすいものであるかは、戦後社会を生きてきたわたしたちにとっては、身に沁^{しみ}みた痛い事実である。じつさい、家族が「愛」を絆^{きずな}に結ばれていると信じている夫婦はいないし、子どもだってそんなことは信じていない。なぜおなじ屋根の下にいるのか、なぜここにいつも帰って来なければならないのか、要は、わたしがここにいる理由、ここにいななければならない理由、²それが不明なままである。それをわざわざ口にしないだけのことだ。

いうまでもなく、子どもは生まれてすぐに親を中心とする家族のなかで育つ。このなかで、食べること、排泄すること、眠ることをはじめ、生きものとして生きることの基本を身につけるだけでなく、他人との話し方、つきあい方、そこでの身ぶり、身ごなしなどの基本も身につけてゆく。が、その過程でかならず対立が起こる。何に関しても抑制ということが求められるか

らだ。食べたいときに食べられない、好き放題にやれない……。他者の望んでいることとの調整が図られるからだ。そこで子どもはむずかる。むずかれば窘められる。叱られる。そして泣く泣く辛抱する……。

母と子のあいだのみならず、介護者と被介護者、子どもの集団のような、閉じられた場所で異なる人間がむきだしで接するとき、そこにはかならずといっていいほどカクシツや悲劇が起る。だからそういう閉じられた場所では、むきだしでない関係、つまり人間関係の **C** といったものが必要になる。家族のなかで、相手を思いやる気持ちとか、礼儀やマナーやルールといったつきあいの作法とかが仕込まれるのも、そういう理由からである。ひとは生まれ落ちてしばらくして、こうした共存の習慣の基礎となるものをしつけられる。

が、そうした「しつけ」の基礎には、まずは家族への信頼と安心というものに浸れていることが前提となる。「**D**」という仕方、たっぷり世話を受けた、ことあるごとにじぶんのことをかまってくれたという感覚がなければ、ひとは他者の命令に従おうとしない。信頼と安心の基礎、それが築かれるのは、じぶんがどうい存在であろうとじぶんがここにいるということだけで大事にされた、無条件に肯定されたという経験があつてのことである。まわりの人間にことごとくこまやかに応対してもらった、手厚く世話してもらったという体験が、「しつけ」などの前提となる他者への信頼感を根づかせる。そして「存在の世話」とでもいうべきそのような経験が、自尊心の基礎となるものを育む。ここで自尊心とは、プライド（自尊心）のことではなく、じぶんを粗末にしない心、かけがえのない自己というものの経験のことである。これがあつてはじめて、ひとは他者の思いへの濃やかな想像力を抱きうるようになる。

「社会的動物」としての人間は、このように、その原型となるものをまずは家族のなかで経験する。そしてやがてとくに親密ではない人びととの関係のなかに出てゆく。いくつかの壁を超えながら。

こうした経験が原型的であるのは、家族という場所において、ひとが〈いのち〉のベアシックスといったものに他者とともに深くふれるからである。それを欠いてはそもそも生きるといふことが成り立たないようなことがらに深くふれているからである。食べること、排泄すること、身を洗うこと、そして生まれること、病むこと、介護すること、死ぬことなどに、である。

もつともそうした〈いのち〉のベシックスにふれる経験は、じっさいにはどんどん削除されてきている。たとえば、ひとが生まれるところ、死ぬところに立ち会ったひとはごく僅かになっている。ほとんどの妊産婦は分娩室ぶんべんで出産し、ほとんどの逝去者は病院のなかで看護スタッフの手で清められる。新生児も遺体もわたしたちが面会するのは、そのあと、からだを整えられ、産着うぶぎもしくは死に装束を着せられたあとだ。病の治療ということもそのほとんどが病院のなかでなされ、介護も施設にお願いすることが多くなった。生老病死だけではない。調理する、排泄するという、ひとのもつとも根本的でないともみも、食べる瞬間、排便する瞬間以外は、なんらかのシステムに依よっている。生き物を殺し調理する過程はすでにある程度なされ、排便後は下水道のシステムがすべてを処理してくれる。多くのひとは食肉がどのような過程を経てこういかたちで提供されているかについてほとんど想像力をなくしているし、他人の便を見たことがないという子どもも少なくない。そして、それを欠いては生きるということが成り立たないようなことがらが、家族生活のなかにあたりまえのように登場しはしないということになると、わたしたちの **E** な存在それじたいが危うくなる。

人類の多くがその社会生活のうちに、〈家族〉というものをもつとも根源的なメタファー（ルート・メタファー）として設定してきたのも、そうした理由によるとおもわれる。父と母と子とそのきょうだい（ときには祖父と祖母も入る）からなる家族のイメージは、じっさいの家族のみならず、たとえば「親分」「兄貴」「姉さん」というふうによくの組織にも転用されるし、スポーツのチームにおける「監督」「コーチ」「主将」「マネージャー」もそれぞれ、父、叔父、兄、母ないしは姉のイメージにも重ね合わされる。男子校、女子校においても、あるいは相撲部屋や宝塚歌劇団のような単一の性からなる集団においても、父親役、母親役、そして子ども役がおのずと生まれる。⁴〈家族〉のメタファーはどんな集団にも容易に浸透してゆき、集団の構成原理としてはたらく。

（鷺田清一『〈ひと〉の現象学』による）

問一 文中の二重傍線部（a・b）のカタカナを漢字に直したとき、同じ漢字を用いるものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

a カンコン

1

⑤ 法律については門外カンだ

④ ラストシーンが圧カんだ

③ 親からカン当される

② カン膚ただなきまで叩きのめす

① 大雨で道路がカン水する

b カクシツ

2

⑤ 陰シツなやり方に怒りを覚える

④ ヒデじいは花輪家のシツ事だ

③ 約束をシツ念する

② 天性の資シツに恵まれる

① 將軍の側シツになる

問二 文中の波線部（i・ii）の意味として最も適当なものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

i コア

3

⑤ 中核

④ 深層

③ 本分

② 必然

① 由来

ii 雛形

4

⑤ 人形

④ 象徴

③ 模型

② 原形

① 複製

iii むずかる

5

⑤ 怒りに我を忘れて泣く

④ 手足をばたつかせて泣く

③ 突然泣き崩れる

② 大声で泣き叫ぶ

① 機嫌を悪くして泣く

問三 文中の空欄（ア～エ）を補うのに最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し

選んではならない。ア 6、イ 7、ウ 8、エ 9

- ① いかに
- ② さらに
- ③ あからさまに
- ④ たしかに
- ⑤ おもむろに
- ⑥ じかに
- ⑦ にわかに
- ⑧ このように

問四 文中の空欄(A・B・E)を補うのに最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し

返し選んではならない。A **10**、B **11**、E **12**

- ① 絶対的
- ② 基本的
- ③ 生物的
- ④ 社会的
- ⑤ 合理的
- ⑥ 一義的
- ⑦ 抽象的

問五 文中の空欄(C)を補うのに最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。 **13**

- ① アトラクション
- ② オプション
- ③ クッション
- ④ コミュニケーション
- ⑤ シミュレーション

問六 文中の空欄(D)を補うのに最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。 **14**

- ① 歯牙にかける
- ② 手塩にかける
- ③ はっぱをかける
- ④ 拍車をかける
- ⑤ 情けをかける

問七 文中の傍線部1(ささまざまな対立項)とあるが、その例として適当でないものを二つ、次の選択肢の中から選べ。ただし、

解答の順序は問わない。 **15**・**16**

- ① 自然に根づいた関係であることと社会という擬制的な制度の原点であること
- ② 外部の権力から身内を護る防壁であることと権力への抵抗の拠点であること
- ③ 一、二人称の関係が維持される場所であることと三人称の関係が発生する場所であること
- ④ 信頼感で結ばれた親密な関係であることと競合する他者との関係であること
- ⑤ 競合とその調停の手段としての契約で成り立つこととそこからの避難所として機能すること
- ⑥ 見返りを求めずに尽くす関係であることと一方が他方を搾取する関係であること

問八 文中の傍線部2（それが不明なままである）とあるが、なぜ「不明」なのか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

17

- ① 家族は人類史のなかできわめて多様な形態を採ってきたものであり、多くの機能を外部に委託するようになった近代以降の形態のみをもって家族のあり方を考えることは困難であるから。
- ② 従来家族が担ってきた人間の生きものとして欠くことのできないとなみが、近代以降は外部に委託されるようになり、家族が私的な愛情と親密さの場という観念的なものに変質したから。
- ③ 家族は私的な愛情と親密さの場所であると考えられているが、「愛」が家族を結びつけるほどの強い絆だとは誰も信じておらず、じつさいに家族がそのような場所にはなり得ていないから。
- ④ 子どもは親を中心とする家族のなかで生きる上で必要なことを身につけるべきであるが、そのような機能が今では外部に委託されており、家族の存在意義が見いだせなくなっているから。
- ⑤ 親と子、介護者と被介護者のような閉じられた場所で異なる人間がむきだしで接することになると、何に関しても抑制ということが求められ、かならず対立関係が生じることになるから。

問九 文中の傍線部3〈自尊心とは、プライド（自負心）のことではなく〉とあるが、筆者は「自尊心」が「自負心」とはどのように異なると考えているか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

18

① 「自負心」は根拠もなく自分を大切な存在だと思ふことであるが、「自尊心」はきちんとした「しつけ」を受けたことで社会のなかで十分に生きていけると実感することだと考えている。

② 「自負心」は家族から大切にされることで自分に自信を持つことであるが、「自尊心」は社会のなかで自分が無条件に肯定されると思うほど他者への信頼感を持つことだと考えている。

③ 「自負心」は他者の思いに関係なく自分が高く評価されることを求めることであるが、「自尊心」は他者の思いに対しての想像力を持った上で自分を大切にすることだと考えている。

④ 「自負心」は自身の才能などによって自分を優れた存在だと思ふことであるが、「自尊心」は周囲の人々から十分に世話をされたことで自分を大切な存在だと思ふことだと考えている。

⑤ 「自負心」は他人との対立関係のなかで相手に負けまいとすることであるが、「自尊心」は他人との信頼関係のなかで自分のことを大切な存在だと認識することだと考えている。

問十 文中の傍線部4（〈家族〉）のメタファーはどんな集団にも容易に浸透してゆき、集団の構成原理としてはたらくとあるが、筆者はその理由をどのように考えているか。最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

19

- ① 家族という持続的な装置は人類史のなかで多様な形態を採っており、どのような集団も何らかの家族的な性格が認められるから。
- ② ひとが他者と関わる時、家族のなかでたつぷりと世話を受けたという感覚が、信頼と安心を得るための前提となっているから。
- ③ 人間は本来、家族という場所において、それを欠いては生きるといことが成り立たないようなことさらに深くふれているから。
- ④ 家族のなかで（いのち）のベーシックスにふれる経験が今ではほとんどなくなり、家族に代わる場が必要とされるようになったから。
- ⑤ 家族のイメージは、じっさいの家族のみならず、やくざの組織やスポーツのチームなどその他の組織にも重なるものであるから。

次の
II の問題は、「国語(2)」の受験者が解答してください。(解答番号は 20 ～ 38)

II 次の文章は平安時代後期に成立した物語、『夜の寢覚』の一節である。これを読み、後の問い(問一～問九)に答えよ。(40点)

太政大臣(殿)には二人の娘がおり、姉の大君に琵琶、妹の中の君に箏の琴を教えていた。特に中の君はすぐれた才能を示す。中の君が十三歳の八月十五夜、箏の琴の演奏に感動した天人が夢に現れ、中の君に琵琶を教える。中の君はこの世に伝わっていない多くの曲を覚える。天人は残る五曲を来年の八月十五夜に教えると約束する。

人の聞くにはかきも鳴らさず、人知れず教へし月日を数へて待つに、またの年の八月十五夜になりぬ。その年、この君は十四になり給ふ。つとめてより雨降り暮らせば、「月もあるまじきなめり」と、口惜しうながめ暮らすに、夕さりつかた風うち吹きて、月、ありしよりも空澄みて、あかくなりぬ。殿は今宵、内に文つくり御遊びあるに参り給ひぬれば、いと静かなるに、端近く御簾巻き上げて、宵には例の箏の琴を弾き給ひて、人静まり夜更けぬるにぞ、琵琶を、教へのままに、音のあるかぎり出だして弾き給へれば、姫君、「つねに弾き給ふ箏の琴よりも、これこそすぐれて聞こゆれ。昔よりとりわき殿の教へ給へど、つねにたどたどしくてえ弾きとどめぬものを、あさましき君の御様かな」と、聞きおどろき、うらやみ給ふ。例の御殿籠もりたるに、ありし同じ人、「教へたてまつりしにも過ぎて、あはれなりつる御琴の音かな。この手どもを聞き知る人は、えしもやなからむ」とて、残りの手いま五つを教へて、「あはれ、あたら、人のいたくものを思ひ、心を乱し給ふべき宿世のおはするかな」とて、帰りぬと見給ふに、この手どもを、覚めて、さらにとどこほらず弾かる。あさましう、思ひあまりて、姉君に、「夢に琵琶を教ふる人こそあれ」とばかり聞こえ給へど、なかなか語り続け給はず。

またかへる年の十五夜に、月ながめて、琴、琵琶弾きつつ、格子も上げながら寝入り給へど、夢にも見えず。うちおどろき

給へれば、月も明けがたになりにけり。あはれに口惜しうおぼえ、琵琶を引き寄せて、

X 天の原雲の通ひ路とちてけり^{vi} 月の都の人も訪ひ来ず³
暁の風に合はせて弾き給へる音の、言ふかぎりなくおもしろきを、大臣もおどろかせ給ひて、「めづらかに、ゆゆしくかなし」⁴
と聞き給ふ。

注 姫君——ここでは姉君のこと。

御殿籠もり——「大殿籠もり」に同じ。

問一 文中の破線部(ア～ウ)の意味として最も適当なものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

ア つとめて					イ 例の					ウ あたら				
20					21					22				
⑤	④	③	②	①	⑤	④	③	②	①	⑤	④	③	②	①
出仕後	稽古中	午前	早朝	昨晚	手本通りに	練習用の	いつものように	話題になっていた	いわれのある	惜しいことに	はなはだ	予想通り	初耳だが	恐るべきことに

問二 文中の波線部 a (給ふ)、b (給ふ)、c (聞こえ) の敬意の対象として最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し選んでもよい。 a 23、b 24、c 25

- ① 殿(太政大臣) ② 姉君(大君) ③ この君(中の君) ④ ありし同じ人(天人) ⑤ 読者

問三 文中の傍線部 i (ぬ)、ii (む)、iii (ぬ)、vi (けり) の助動詞の意味として最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し選んでもよい。 i 26、ii 27、iii 28、vi 29

- ① 意志 ② 打消 ③ 詠嘆 ④ 婉曲 ⑤ 過去 ⑥ 完了 ⑦ 推量

問四 文中の傍線部 (iv・v・vii) の(る)の文法的説明として最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し選んでもよい。 iv 30、v 31、vii 32

- ① 四段活用動詞の一部 ② 下二段活用動詞の一部 ③ ラ行変格活用動詞の一部 ④ 受身の助動詞
 ⑤ 尊敬の助動詞 ⑥ 存続の助動詞 ⑦ 過去の助動詞の一部 ⑧ 断定の助動詞の一部

問五 文中の傍線部1〈うらやみ給ふ〉とあるが、姉君が「うらやむ」という心情になった理由として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

33

- ① 琵琶については、姉妹とも人に聞かせることができない程度だったのに、妹が抜け駆けをして誰かに教えを請い、その結果、人前で演奏するほどに上達していたから。
- ② 実は見事な琵琶の技量を身につけていた妹は、姉の自分に遠慮して本当の腕前を隠し、父の前でただどしく琵琶の演奏をするという奥ゆかしさも身につけていたから。
- ③ 幼い頃は父から特別に琵琶も教えてもらっていたけれども、なかなか上達しなかった妹が、人知れず夜中に琵琶を弾き続けることで、箏の琴以上の腕前になっていたから。
- ④ 幼い頃から父に琵琶を教えてもらっている自分はきちんと弾くことができないのに、箏の琴を教わっていた妹が箏の琴以上に琵琶を驚くほど上手に弾きこなしていたから。
- ⑤ 自分は琵琶を父親にしか教えてもらえず、力量がさほど上がっていないのに対し、妹は天人からも教えてもらおうという自分には願うべくもない扱いを受けていたから。

問六 文中の傍線部2〈教へたてまつりしにも過ぎて〉の意味として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

34

- ① 父君が中の君にこれまでもお教えした以上に
- ② 中の君が天人に昨年お教えになった以上に
- ③ 中の君が天人にお教えになった当時でも
- ④ 天人が中の君に昨年お教えした以上に
- ⑤ 天人が中の君にお教えした当時でも

問七 文中の傍線部3（月の都の人も訪ひ来ず）とあるが、「訪ひ来」なくなった「月の都の人」が中の君に残した言葉とはどのようなものだったか、その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

35

- ① たとえ肉親であったとしても、天人である自分を見たことは決して口外してはいけないという命令。
- ② 中の君の演奏を聞き知った人々は、これからも心を強く揺さぶり続けられるだろうという賞賛。
- ③ 来年の今月今夜に再びやってくるので、これまでと同じように待っていてほしいという約束。
- ④ 悩み苦しまなければならない運命のもとで、中の君は生きていくことになるだろうという予言。
- ⑤ 特別な能力を与えたため、かえって中の君をつらい道に進ませることになってしまったという謝罪。

問八 文中の傍線部4（めづらかに、ゆゆしくかなし）の解釈として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

36

- ① 類いなく、もっと聞きたくなるほどに巧みだ。
- ② めづらしくて、心が澄みわたるほどに優美だ。
- ③ 風変わりで、我慢がならないほどにねたましい。
- ④ 風変わりで、泣きたくなるほどに寂しげだ。
- ⑤ 類いなく、不吉さを感じるほどにいとらしい。

問九 次の説明文の空欄（Y・Z）を補うのに最も適当なものを、後のそれぞれの選択肢の中から選べ。

本文中の和歌（X）は、六歌仙の一人で、九世紀に活躍した僧正遍昭の「天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよをとめの姿しはしとどめむ」を踏まえていると考えられる。この遍昭の和歌は、醍醐天皇の命により撰和歌集であるZに入集している。また、『百人一首』に入っていることでも知られている。

Yらが編纂した、最初の勅ちやく

- | | |
|--|--|
| Z | Y |
| <input checked="" type="checkbox"/> 38 | <input checked="" type="checkbox"/> 37 |
| ① 万葉集 | ① 大伴家持 |
| ② 古今和歌集 | ② 菅原道真 |
| ③ 山家集 | ③ 在原業平 |
| ④ 新古今和歌集 | ④ 紀貫之 |
| ⑤ 金槐和歌集 | ⑤ 藤原定家 |

次の
Ⅲの問題は、「国語(1)」の受験者が解答してください。(解答番号は 39 ～ 55)

Ⅲ 次の文章を読み、後の問い(問一～問十)に答えよ。(40点)

もし道德の薬が発明されたとしたら、あなたはそれを服用するだろうか。あるいは、他者に危害を加える可能性が十分に予見できる人に対して、その薬の服用を勧めることはできるだろうか。こうした問いが、いま生命倫理の領域で提起され、議論されている。

一方には、道德の薬などという考えは実に I であって、論じるに値しないという反応がありうる。あるいは、この問題提起は、生命倫理の重要な原則である自律を損なうという反論もありうる。さらには、非道德的に振る舞う自由を制限することで、自由概念を侵犯することになるという反論もあることだろう。

しかし、他方には、他者への共感や想像力を全く欠いた人によってなされる残忍な悪を前にすれば、道德の薬をその人に、事後もしくは事前に用いることを許容してもよいのではないかという議論もありうる。たとえば、コーエン兄弟の映画「ノーカントリー」に登場するアントン・シガーのように、他人の生死をコインの裏表によって決めるような殺し屋に対して、もし道德の薬があればと思う人もいるかもしれない。

¹ とはいえ、賛成反対どちらの側に立ったとしても、この道德の薬というアイデアとそれを議論する枠組みそれ自体に対して、わたしたちは何か居心地の悪さを感じずにはいられない。その居心地の悪さの中心にあるのは何だろうか。それを考えていくと、悪が個人の道德の問題に還元されているということに思い至るのである。

ア、薬によって一人一人が道德的に改善された社会は、悪を本当に克服することのできた社会なのだろうか。

イ、社会的に極めて劣悪な環境に置かれた人々に対して、道德の薬が処方されたとしてみよう。その人々は自らの怒りを抑制し、自己犠牲を払うようになるかもしれない。それは、劣悪な環境を作り出している側の人々や制度にとっては大変都

合のよい事態である。ウ、それは、劣悪な環境それ自体を改善し、よりましな社会を作ろうとする努力に対しては、冷や水を浴びせかけるものだ。正当な怒りが社会変革のきっかけになりうることは経験が教えるところである。わたしたちは、個人に還元できない、いわば社会的な悪があることを正面から見据え、**エ** 手間暇かかるにせよ、その悪をできるだけ少なくするようにした方がよいのではないだろうか。

また、²個人の道徳という概念が、それ自体問題含みであるように思われる。それは、個人の道徳という概念がしばしば特定の道徳観に基づいていて、批判的な反省抜きに、ある特定の社会のあり方を容認しがちだというだけではない。たとえばそれが、他者への共感や他者への配慮といった、相当程度**A**に受け入れられるものに基づいていたとしても、それを人々の間に拡大していけば、おのずと悪がなくなるといふシナリオはそれほどうまくいくとは思われないからである。

これにはいくつかの理由がある。

一つは、他者はその定義からして共感や配慮をはみ出すものであってもおかしくない以上、最初から共感や配慮が可能な相手として他者を取り上げることが、ある範囲を超えた他者を知らず知らずのうちに排除することになり、それ自体が悪を誘発しかねないからである。

もう一つは、ある部分で道徳的に振る舞うことが、必ずしも他の部分に善をもたらすわけではなく、かえって悪をもたらすことがあるからである。たとえば、道徳の薬の効能を主張する人は、目の前の困窮している人に金品を与えることを道徳的であると考えるが、しかし、それが貧困の背後にある構造を解決することにまで及ばなければ、かえって貧困を固定化してしまうことがある。また、その人の属している組織が悪をなそうとしている場合に、その組織や役員に対して誠実であるということが、**凡庸**だが極めて残酷な悪をもたらすことは、これまた歴史が教えるところである。

注意しなければならないのは、個人の道徳を主張することだけで満足することである。とりわけ、3・11の後を生きるわたしたちはこのことに無^aト^aン^aチャクではいられない。3・11なかでもフクシマをもたらした災厄は巨大な悪である。その悪を過小に見積もったり、何らかの意味を勝手に与えたりするのは慎むべきだろう。たとえば、それは、自然的な悪でもなければ、「天

罰」のような意味を与えられるものでもない。

かつて寺田寅彦は、関東大震災を念頭に置いてこう述べていた。

一家のうちでも、どうかすると、直接の因果関係の考えられないような色々な不幸がヒンパツすることがある。すると人はきつと何かしら **B** な因果応報の作用を想像して祈禱や厄払いの他力にすがろうとする。国土に災禍の続起する場合にも同様である。しかし統計に関する数理から考えてみると、一家なり一国なりにある年は災禍が重畳ちようじようしまた他の年には全く無事な廻り合わせが来るということは、純粹な偶然の結果としても当然期待され得る「自然変異」の現象であつて、別に必ずしも怪力乱神を語るには当らないであらうと思われる。

(寺田寅彦「天災と国防」一九三四年)

しかしここで一つ考えなければならぬことで、しかもいつも忘れられがちな重大な要項がある。それは、文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその激烈の度を増すという事実である。

(同上)

こういう風に考えて来ると、あらゆる災難は一見不可抗的のようであるが実は人為的のもので、従つて科学の力によつて人為的にいくらでも軽減し得るものだという考えをもう一遍ひっくり返して、結局災難は生じやすいのにそれが人為的であるがために却つて人間というものを支配する不可抗的な方則の支配を受けて不可抗的なものであるという、奇妙な廻りくどい結論に到達しなければならぬことになるかもしれない。

(寺田寅彦「災難雑考」一九三五年)

ここに示された、科学技術に対する寺田寅彦の洞察は、今でも傾聴に値するものである。それは、天災は科学技術によつて制御し尽くせるものではなく、かえつて科学技術の進展とともに激烈になつてしまふことを教える。わたしたちが3・11において直面したのは、自然的な悪ではなく、人為が加わるることによつてさらに激烈となつてしまつた悪なのだ。さらに、寺田は、災禍の原因として「怪力乱神を語るには当らない」とも述べていた。そのような超自然的な意味づけは不要であるばかりか、有害である。

そうであれば、フクシマをもたらしたこの巨大な悪に臨むためには、わたしたちの文明のあり方、社会のあり方、科学技術のあり方に対する根本的な反省と、それを経たうえでの、文明・社会・科学技術に対する新たな想像力が必要であると思われ

る。しかし、実際には、そうした思考が徹底化される前に、すぐに回帰してくる日常に飲み込まれ、悪を悪として問う契機を失いかねなくなっている。その中で個人の道徳が強調されるのは問題である。

必要なことは、個人の道徳には決して還元できない、社会的な悪の次元があるという認識を持つことだ。繰り返しておく、道徳の薬を用いて個人の道徳を高めればよいとの主張は、必ずしも社会的な悪の次元を思考することに資するわけではない。⁴ 悪者をつきとめ、その人々を道徳化すれば、悪を克服できるわけではない。そうではなく、悪を生み出している社会的な仕組みやわたしたちのライフスタイルを、思考を通じて把握し、それを改善する努力により注意を払うべきではないのだろうか。それは、社会的で公共的な想像力や手間暇かけた教育を要請することに繋がることだろう。

(中島隆博『悪の哲学——中国哲学の想像力』による)

注 3・11——二〇一一年三月二日に宮城県沖で発生した巨大地震によりもたらされた複合的な災害を指す。

フクシマ——二〇一一年三月二日の巨大地震によって発生した福島第一原子力発電所の事故とそれに関連する災害を指す。

寺田寅彦——物理学者、随筆家(一八七八―一九三五年)。

問一 文中の二重傍線部 (a・b) のカタカナを漢字に直したとき、同じ漢字を用いるものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

a トンチャク

- 39
- ① 今日はドン天だ
 - ② 計画がトン挫する
 - ③ 犯行現場に残されたドン器
 - ④ 部隊が駐トンする
 - ⑤ ドン欲さは身を滅ぼす

b ヒンパツ

- 40
- ① 迎ヒン館で食事をする
 - ② ヒン相な格好
 - ③ 出現ヒン度を調べる
 - ④ 気ヒンある振る舞い
 - ⑤ 海ヒン公園を散歩する

問二 文中の波線部 (i~iii) の意味として最も適当なものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

i 凡庸

- 41
- ① ありがたみのない当たり前のこと
 - ② よく見られるありふれたこと
 - ③ 日常的で面白みに欠けること
 - ④ 重要であるのに気づかれにくいこと
 - ⑤ 考えが浅はかで軽はずみなこと

ii 傾聴

- 42
- ① そばで静かに聞くこと
 - ② 疑いながら聞くこと
 - ③ 聞いているふりをすること
 - ④ 謹んで聞くこと
 - ⑤ 熱心に聞くこと

iii 資する

- 43
- ① 助けとなる
 - ② 邪魔になる
 - ③ 直結する
 - ④ 懸命になる
 - ⑤ 影響を与える

問三 文中の空欄（I）を補うのに最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。 44

- ① 千差万別
- ② 荒唐無稽
- ③ 無念無想
- ④ 空前絶後
- ⑤ 杓子定規^{しゃくし}

問四 文中の空欄（ア～エ）を補うのに最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し

選んではならない。ア 45、イ 46、ウ 47、エ 48

- ① しかも
- ② たとえば
- ③ さらに
- ④ たとえ
- ⑤ つまり
- ⑥ しかし
- ⑦ それどころか
- ⑧ いったい

問五 文中の空欄（A・B）を補うのに最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し

選んではならない。A 49、B 50

- ① 表面的
- ② 部分的
- ③ 神秘的
- ④ 人為的
- ⑤ 理想的
- ⑥ 普遍的

問六 文中の傍線部1へわたしたちは何か居心地の悪さを感じずにはいられないとあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

51

- ① 道徳の薬という考えも、その是非について意見を交わすことも、自分自身の性質の善悪について思いを致すことになり、胸を張って善人であるとは言えない自分には居場所がないような気がしてきってしまうということ。
- ② 道徳の薬という考えそのものやそれについての議論を聞いても、生命倫理という分野に馴染なじみがなく理解が及ばないためか、道徳が自分の外で勝手に決められている気味の悪さを覚えるということ。
- ③ 道徳の薬という考えそのものも、その薬の是非について意見を交わそうとすることも、そもそも薬の実効性について十分な検討を経ていないので、議論の前提そのものが疑わしく感じられてしまうということ。
- ④ 道徳性に欠ける人に薬を与えて治療しようという発想に基づいて、さまざまな視点からこの薬の是非について意見を出し合って検討を重ねたとしても、本質を取り逃がしているような気がするということ。
- ⑤ シガーのような極悪人を道徳の薬で治療することは当然であると思いつつ、そのことを議論し始めると、賛成したとしても反対したとしても、本当にその判断で良かったのかという気持ちになるということ。

問七 文中の傍線部2（個人の道徳という概念が、それ自体問題含みであるように思われる）とあるが、この「問題」にあてはまらないものはどれか。最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

52

- ① 個人の道徳観はそれぞれで異なるものだから、葉によって一律に治療できるようなことにはならない。
- ② 個人の道徳観の形成には、その人が暮らす社会や関わるコミュニティの価値観が影響を与えるため、偏ってしまう傾向がある。
- ③ いくら個人としての道徳を高めた人々が集まって作り上げたとしても、道徳的な社会となるわけではない。
- ④ 他者への思いやりを持った、十分に共感できるような道徳観なので問題はないと思っても、共感できない人は必ずいる。
- ⑤ 自分が正しいと信じ、他者にとってよいことだと思っただけだが、必ずしも道徳的であるとは限らない。

問八 文中の傍線部3（そのような超自然的な意味づけは不要であるばかりか、有害である）とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

53

① 3・11のような、人為が加わることによってより甚だしくなった災害に直面したとき、人はそれを天の神から下された戒めだと考えて受け入れてしまいがちであるが、そのような態度では天の悪を根本的なかたちで究明することは繋がっていかないから。

② この世界で起こるすべてのことは人知を超えた神的存在によってもたらされるものだと考え、直面した災禍もその枠組みの中で捉えようとするのは、一見するととても成熟した考えのようであるが、実際は単に思考するのを停止してしまっているのに過ぎないから。

③ フクシマのような災禍は科学技術によって激烈になったものであるのに、それを人間には太刀打ちできない災害だったのだなどと捉えることはそもそも誤っている上、そのように考えることはこの災禍の人為的な側面をかえって見失わせることになってしまうから。

④ 世界のすべては自分たちが制御できるといふ、人間の傲^{おご}った考え方に対して厳しい制裁を加える神のような存在を、説明するのに都合だからと本心からは信じないままに祭り上げるのは、自己の取るべき責任を他者になすりつけることにしかないから。

⑤ 3・11の持っている天災の側面と人災の側面とはもとよりきちんと分けて考える必要があるが、どうしても判然としない部分については、いきおい人災ではなく天災として意味づけることが多くなってしまい、問題の根本的解決に至ることはないから。

問九 文中の傍線部4（悪者をつきとめ、その人々を道德化すれば、悪を克服できるわけではない）とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

54

- ① 道德の葉のようなものを使って個人の道德をいくら高めても、表面的なその場しのぎに過ぎず、人間への懲罰の意味を持つ天からもたらされる災禍を含んだ社会全体の悪を無くすことなどではできないから。
- ② この世の悪には問題の大きさに応じて定められる次元があつて、われわれが真に克服しなければならないのは一番高い次元の悪であるが、それはもはや道徳的なアプローチではどうすることもできないものであるから。
- ③ 悪と言つた場合、われわれが想定しなくてはならないのは、あらゆる次元の悪の総和として捉えられるものであり、その克服の手段としては実際に一つ一つの悪を相手にしていくほかないのだが、目指すところは個別の悪ではないから。
- ④ 悪の克服を考える際に最も取り扱いが難しい存在は、心の中に悪の根源を宿している自分自身であり、悪の根本的な克服のためには丁寧で実践的な教育が必要となるのであるが、それは余りにも長い時間を要するものだから。
- ⑤ 悪は社会や文明によつてももたらされるため、悪の克服には社会のありようを見つめなおす姿勢が不可欠であり、悪事を働いた者を一人一人見つけ出して矯正していけばすべての悪がなくなるといふわけではないから。

問十 本文で触れられている寺田寅彦は夏目漱石に師事していたことが知られている。漱石の作品を次の選択肢の中から選べ。

55

- ① 『山月記』
- ② 『杜子春』
- ③ 『虞美人草』
- ④ 『富嶽百景』
- ⑤ 『浮雲』